清洲城下町の堀の復元

金原　宏

Ⅰ　はじめに

清洲城は、15世紀後半、応仁・文明の乱前後の築城とされている。文献上では、文明10年（1478）の「親元日記」が初見である。その後、清洲城は、次第に尾張支配の中心となり、尾張統一を目指す信長も弘治元年（1555）ここに進出している。信長の小牧進出後もおそらく廃城とならなかったと思われる。本能寺の変後は、遺臣らの会議が清洲城で開かれ尾張を領した織田信雄が城主となっている。以後、豊臣政権下では、豊臣秀次、福島正則、関ヶ原合戦後は、松平忠吉、徳川義直と尾張の領主を城主としたが、慶長15年（1610）名古屋城築城に伴う「清洲越し」によって城と城下はすべて解体している。

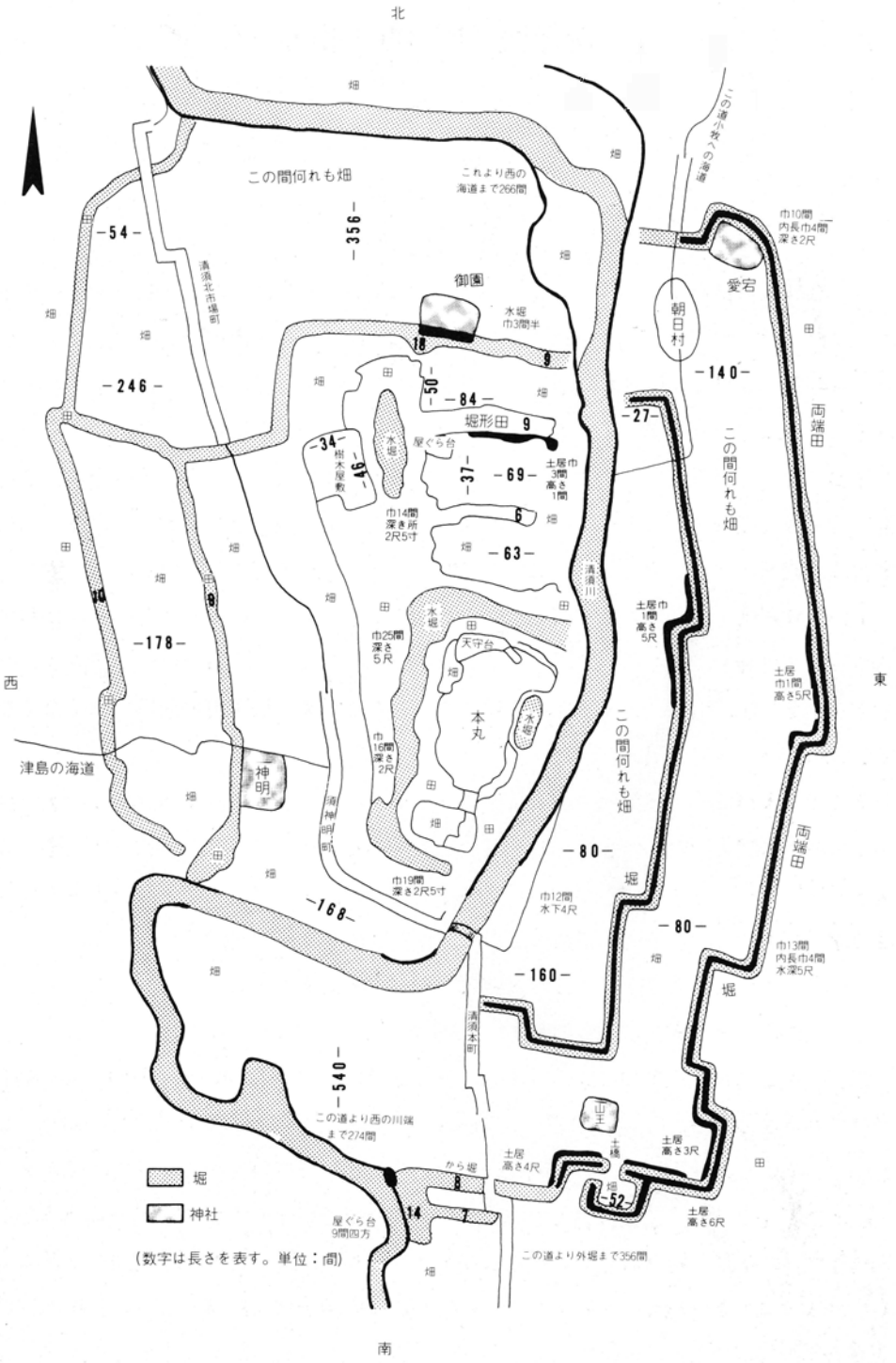
清洲城移転後、この地域は開墾を命じられ、農村化することになる。町跡には、わずかに残存した社寺や農家と周辺の村々から入耕した人々によって、再び新田が形成されたのである。その後、清洲は、美濃路の宿場になったとはいえ、城下町の面影は全くなくなってしまったといっても過言ではない。

そこで、本研究は、発掘調査の結果を考慮して、清洲村古絵図[1]を基本に、近世の村絵図から堀の遺構の残存状況を抽出し、堀の配置をみた。そして、それを照合しながら、地籍図と航空写真によって地割を検討し、堀の遺構をみた。さらに、堀の遺構を比定される地域の地質調査を行い、清洲城下町の堀の配置を現在の清洲町の地図に照合した。

Ⅱ　清洲城下町の堀の復元

1　発掘調査と清洲村古絵図

昭和60年度の発掘調査の結果、清洲城下町遺跡において清洲城の中堀、朝日西遺跡において外堀が検出された。第２図は、清洲城下町遺跡の堀の土層セクションである。堀の規模は、幅17m、深さ1.5mで、神明社の南側を東西に走っている。これを第１図の清洲村古絵図と照合すると、古絵図の堀も神明社の南側を東西に走り、堀の規模も幅９間、深さ３～４尺で、ほぼ発掘調査結果と同じ数値を示している。また、朝日西遺跡の外堀についても同様のことがいえる。したがって、本研究では、清洲村古絵図を基本に、堀の推定復元をすすめていくことにする。



第1図　清洲村古絵図(蓬左文庫所蔵より作成)

2　村絵図からの堀の復元

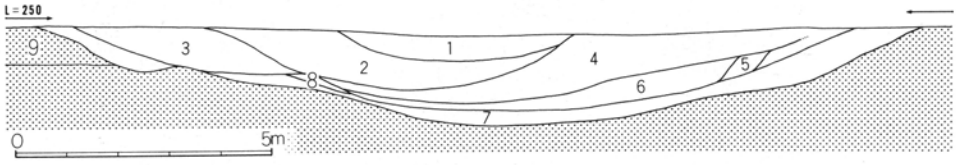
清洲城下町の範囲内にかかわる村絵図として、清洲村絵図(1838年)、朝日村絵図(1841年)、寺野村絵図（1841年)、田中村絵図（1841年）があるが、ここでは清洲村絵図を一例として考察をすすめる（第５図)。村絵図から堀の遺構を抽出する際に、次の２点に注目した。

ⅰ）用水路・川田

張洲府志[2]に「〔五条橋〕在ニ清洲驛中一。是往昔城　湟引ニ河水一。是城門之橋也。」とあるように、旧河道を巧みに利用した清洲城下町のあり方を考えると、堀跡を狭くして田や用水路として利用したと考えられるからである。

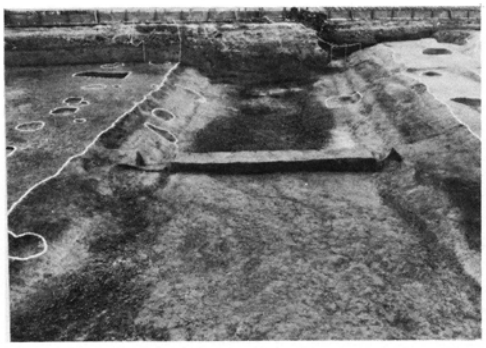
ⅱ）新田

尾張徇行記[3]に「此村ハ城府ノ址也。慶長年中城ヲ　名古屋ニ遷シ玉フ後、其地ヲ開墾シテ、村落トナレリ、サレヘ寛文年ノ覚書ニハ清洲新田トアリ。」とあるように、慶長15年（1610）の「清洲越し」の後、城下が開墾されて新田名がつけられている。特に、堀跡は、新田開発に適した場であったと考えられる。村絵図に残る新田は、古川新田、辰・寅等の干支の付いた新田、安藤新田がある。古川は、五条川を利用した堀跡に付いた名前と考えられ、それが新田と結びついて古川新田となったのであろう。干支の付いた新田は多数あるが、ここでは、古川新田に連続するものだけとりあげた。なお、干支は検地を受けた年



1．淡灰褐色砂　2．灰褐色砂　3．灰褐色砂(砂質強)　4．灰褐色砂　5．茶褐色シルト
6．暗青灰色砂　7．灰色砂　8．暗灰色砂　9．黄褐色砂

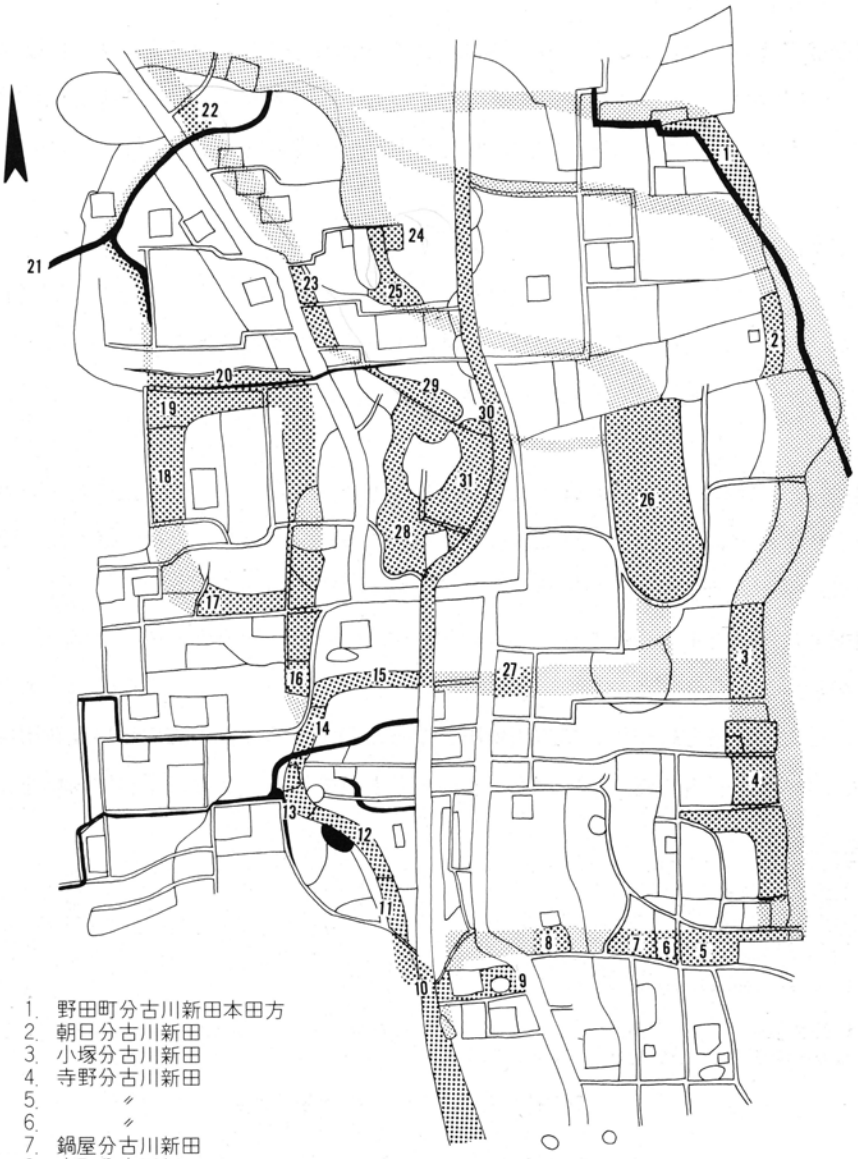
第２図　清洲城下町　中堀土層断面図



第３図　朝日西遺跡(外堀)



第４図　清洲城下町遺跡(中堀)

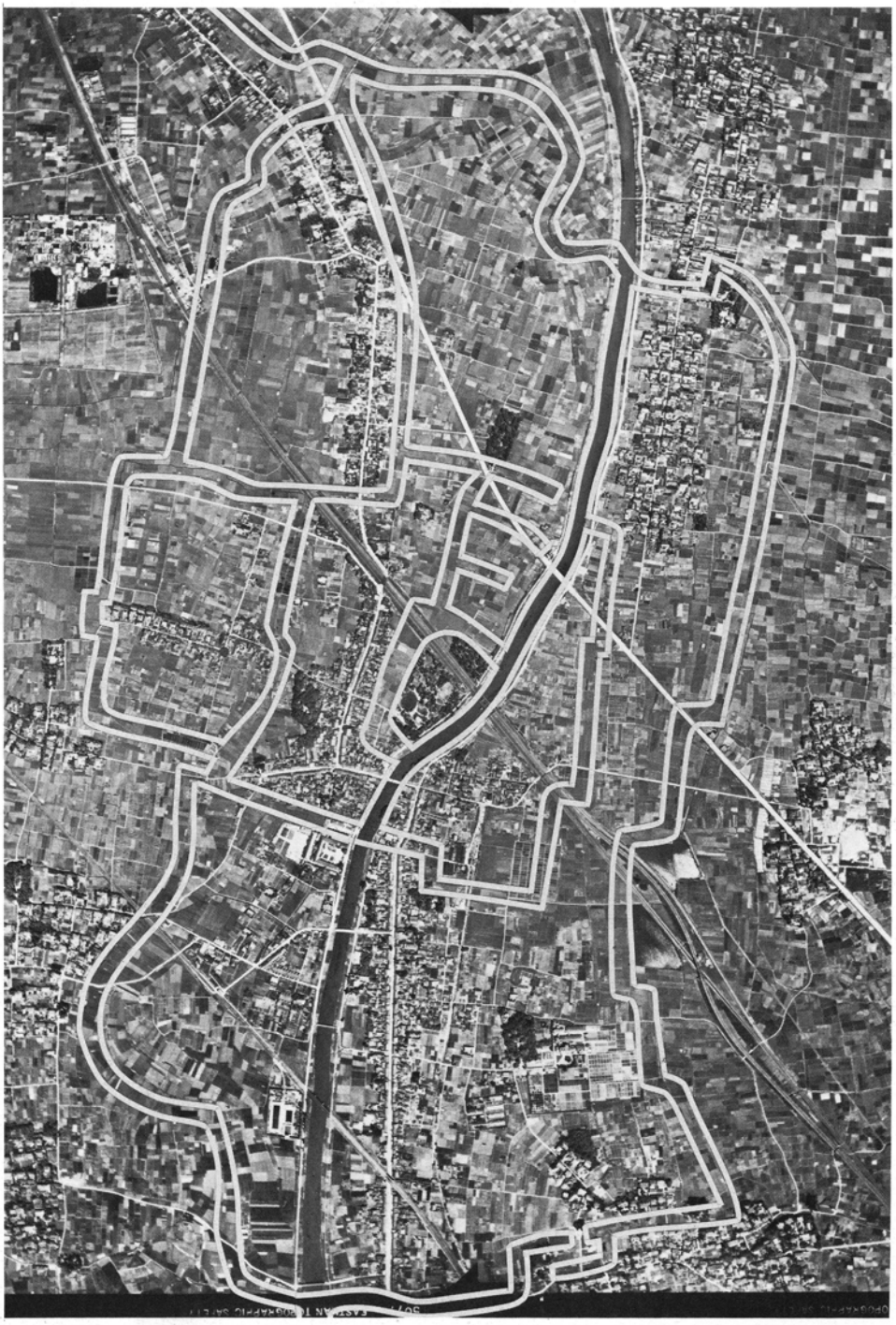


1. 野田町分古川新田本田方
2. 朝日分古川新田
3. 小塚分古川新田
4. 寺野分古川新田
5. 〃
6. 〃
7. 鍋屋分古川新田
8. 本町分古川新田
9. 〃
10. 午新田
11. 上条分
12. 安藤新田
13. 宇古川御替地
14. 小塚分午新田
15. 田中町分田
16. 西市場分戌新田
17. 井池古川新田
18. 宇西川田
19. 北川田
20. 内北市場分古川新田流筋
21. 此江通西市場村用水
22. 内北市場分寅新田
23. 町本田
24. 野田町分辰新田
25. 内北市場分辰新田
26. 田中町分古川新田
27. 内須ケ口古川新田
28. 田中町分未新田
29. 未新田
30. 午新田
31. 田中町分古川新田

第5図　清洲村絵図からの堀の復元



第6図　地籍図からの堀の復元



第7図　航空写真からの堀の復元

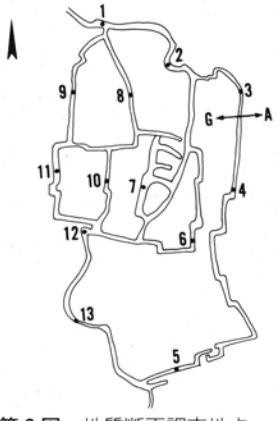
のものであり、辰新田（1652年）、寅新田（1662年）、西市場戌新田（1694年）、午新田（1726年）、未新田[4]（1751年）である。安藤新田[5]は、安藤善六の請負によるものである。

3　地籍図からの堀の復元

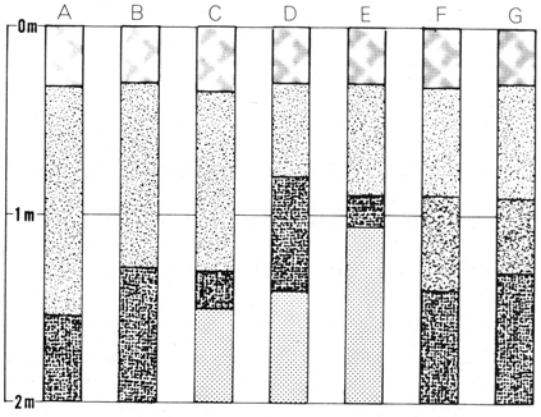
村絵図からの堀の推定をもとに、地籍図からの堀の抽出を行なった（第6図参照）。地籍図は、昭和13年清洲町・新川町土地宝典所収のものを使用したが、これらは、明治21年の地籍図が基になっている。地籍図から堀の遺構を抽出する際に次の2点に注目した。

ⅰ）堀に関係する字名

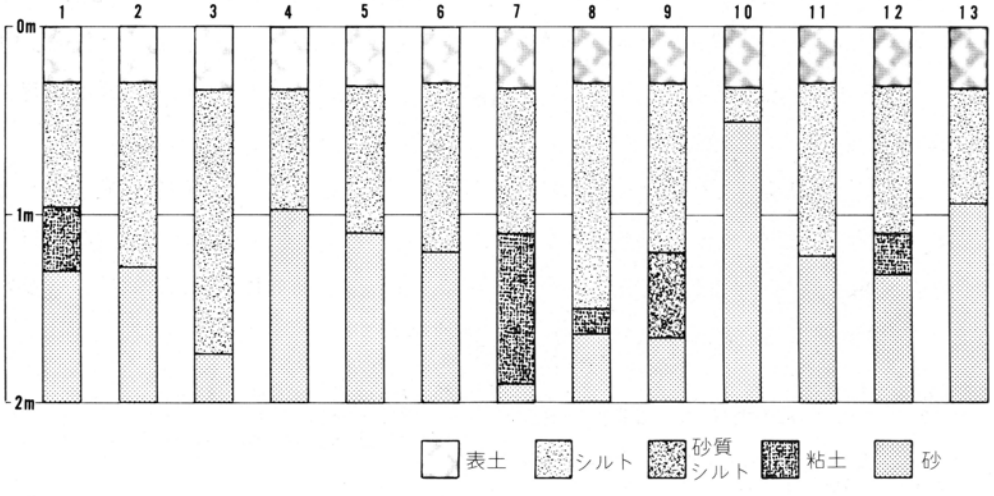
「清洲越し」から約300年も経過している関係からすぐに結びつけることはできないが、「内堀」「外堀」の字名は城下町時代の堀を示すものであろう。また、「管田」「埋田」「川田」「錠田」「堤添」「古堤」「御替地」「土居」も堀に関係する字名と考え、付近の地割を慎重に検討した。



第8図　地質断面調査地点



第9図　地質断面図



第10図　地質断面図

ⅱ）特徴ある地割

堀の遺構は、特徴ある地割を示している。水田に注目し、一筆の土地が同じ幅をもって細長く帯状に区画され、さらに連続性をもっている地割を抽出した。これらは、明らかにまわりの地割とは異なっている。

4　航空写真からの堀の復元

昭和21年、アメリカ軍撮影の航空写真を使用した（第７図）。地割は、地籍図とほとんど変わらないが、田畑等の区別や地質の違いを判別するために使用した。

5　地質断面図

第８図に示した地点での発掘調査やボーリング調査から、堀の地質断面図を作成した。第９図は、昭和59・60年度朝日西遺跡の調査結果から作成したものである。外堀を横断する形で、東Ⓐから西Ⓖに５ｍ間隔で地質をみた。この中で、Ｃ～Ｅが堀の中、ＡＢ、ＦＧは堀の両側である。地質を比較すると、Ｃ～Ｅは水量が多く流れの速いところであったことがうかがえる。つまり、旧河道を利用して堀が作られていたことがわかる。城下町当時の堀については、「東槎録(6)」に「海を引きて濠と為す。水深く且つ濶く、舟楫通行す。」とあり、堀の水深は深く、幅も広く水量が多かったことを示しており、Ｃ～Ｅの断面図と一致している。こうした考えをもとに、堀と比定した地域で、ボーリング調査による地質断面図を作成した。第10図の１～13地点とも２ｍ以内の高いレベルで砂層がみられ、前述の堀の地質（Ｃ～Ｅ）と同じであることから、ほぼ旧河道を利用した堀であると考えられる。

Ⅲ　おわりに

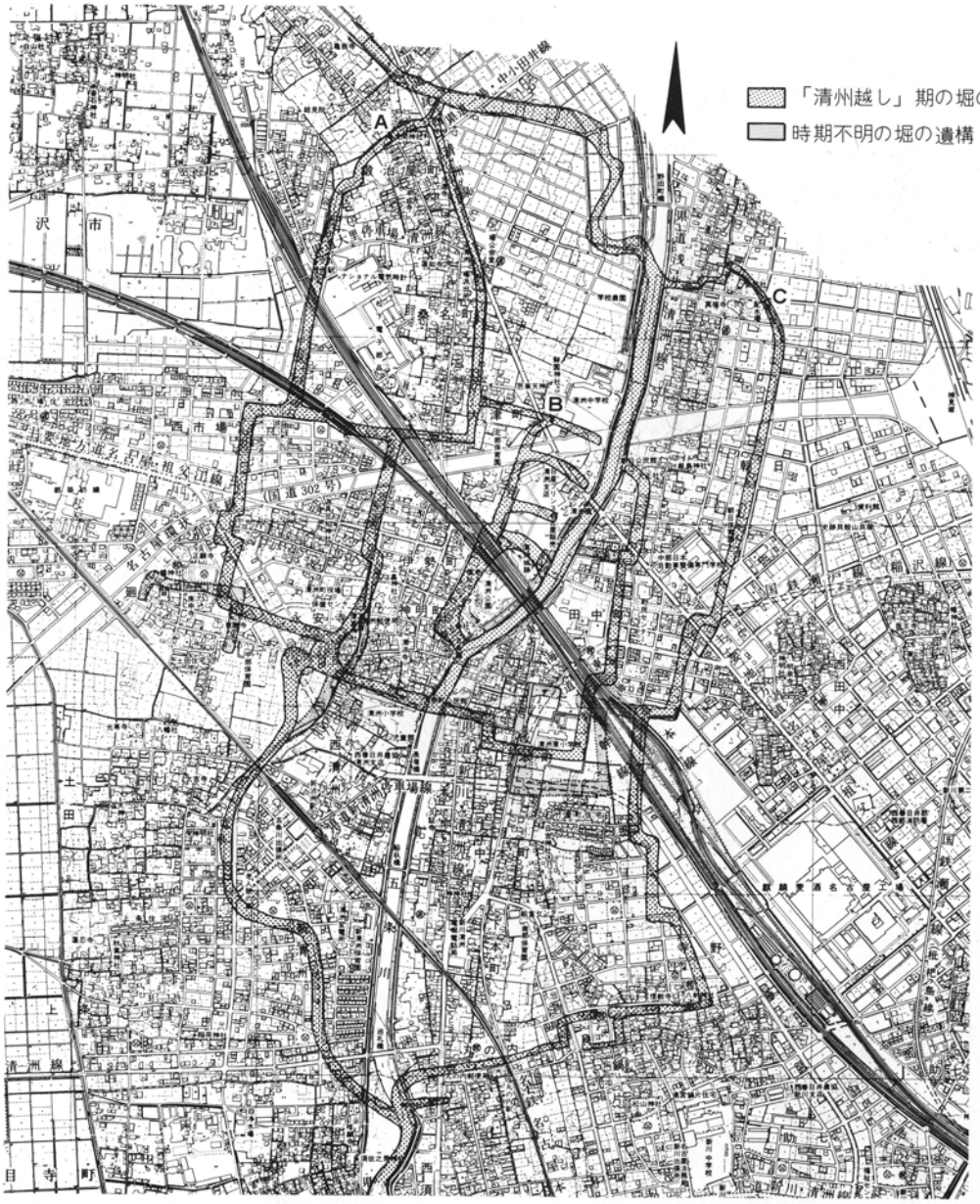
清洲村古絵図を基に、村絵図、地籍図、航空写真、発掘調査、ボーリング調査によって清洲城下町の堀の復元を行い、堀の配置を現在の清洲町の地図に照合した（第11図）。その結果、堀は、北方の春日村落合を分岐点に、南の清洲町丸ノ内を合流点にし、外堀、中堀、内堀の三重となって清洲城下町をめぐっていた。堀に囲まれた城下町の規模は、南北2.7km、東西1.6mで「関東の巨鎮」としての城下町であったことがうかがえる。

ところで、本研究においては、清洲村古絵図を基本にしたため、第11図等の堀の復元は信雄の城下町拡張期から「清洲越し」までの配置に近い。しかし、地籍図、航空写真等で検討すると、他にも堀の遺構であると思われるものが数多くみられる。これらは、信長入城の頃の遺構であると考えられる。今後の研究に期待したい。

〔注〕

(1)　逢左文庫所蔵
(2)　清洲志　津梁の条（松平君山『張洲府志』巻第十　1952）３頁
(3)　清洲の条（『尾張徇行記』第３巻　名古屋市教育委員会　1966）204頁
(4)　注(3)と同じ　203頁
(5)　注(3)と同じ　220頁
(6)　『清洲町史』（清須町史編さん委員会　1969）160頁





第11図　清洲城下町の堀の復元　　1：2000